

## トピックス 甚兵衛窯の発掘から

越中瀬戸焼の復興を押し上げた、1940年東京帝室博物館・1942年小山富士夫の発掘調査について、以前本館展示で紹介したところです。

復興機運が盛り上がってきた1936年9月、新瀬戸小学校訓導新木茂次郎、越中瀬戸焼収集家萩中喜代治・土井法薫（上市町新屋）の三人が、下瀬戸「甚兵衛窯」の発掘を行いました。

発掘では、300点に及ぶ完形品が発掘され、新聞各紙で大々的に報道されました。発掘品は新瀬戸小学校に納めるとされましたが、該当するものはこれまで確認されていませんでした。

近年オークションに「甚兵衛窯」の名前のある越中瀬戸焼が出品されており、そのうち入手された中に、1936年の発掘品とみられるものが見つかったので紹介します。

### 1 新木茂次郎の箱書きのある甚兵衛窯発掘品

箱蓋には「越中瀬戸焼抹茶盃 五客」とあり、茶碗5個一組を納めていました。

蓋裏には、新木茂次郎が次のように由来を記しています。

昭和十一年九月七日午後五時上段村下瀬戸十六番地戸主吉田林造氏宅地内ノ俗称甚兵衛窯ニテ焼成リ物ニシテ放棄セラレタル陶器ヲ発掘セリ 即チ此ノ陶器ハ当時ノ発掘品ニシテ明治初年八代甚五郎ノ製品ト推定ス

昭和丙子晩秋 新木茂次郎記之

当時の新聞では、明治初年八代目甚兵衛の作で、製品を入窯したまま廃窯したものを掘り出したと説明した。箱書きでは八代甚五郎と修正しているが、同一人物のことである（八代目のみ甚五郎を名乗ったという）。

5点の碗は、高さ5cm、口径12.9cmの同寸法の平碗で、内面には細かいろくろ目と茶溜りが見られます。高台は強く磨かれており、新木によるものか。

これらは、新木の箱書きがあることからみて、1936年の発掘品のはじめての確認例となり、貴重です。

### 2 帝室博物館発掘ラベルを貼った碗

口径11cm、高さ4.8cmの碗で、1と形が似るがやや小さい。

腰下には「甚兵工」と手書き墨書した紙ラベル（縦3.1cm×横1.15cm）が貼られています。このラベルは、1940年東京帝室博物館発掘品に貼り付られた紙ラベルと同一品で、いったん整理対象品として扱われたことがわかります。

ところが甚兵衛窯は帝室博物館調査の3年半前に新木らによって発掘が行われており、すべて掘り出されていたことから、その発掘品の一部が帝室博物館に提供されたと考えられます。報告によれば甚兵衛窯は調査していません。

したがってこの碗は1936年の発掘品と推定されます。1940年の調査に加わった萩中喜代治らが提供したのかもしれない。

### ～発掘余話～

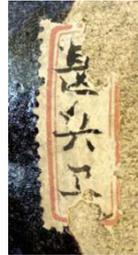
新木らが行った発掘後の10月、富山県は市町村長あてに「古墳等発掘に関する件」という通知を出しました。この趣旨は「郷土の歴史に関心を持って研究に熱心の余り、法規を無視して古墳などの遺跡を発掘し、破壊したり、埋蔵物を発見しても届出を怠ったりすることのないよう、一般に注意を喚起したもの（『富山県史』）」です。具体的には記していませんが、新木らの発掘のことでした。これは学術調査ではなく趣味の発掘とされました。正式な学術調査は1940年帝室博物館が最初でした。



1 新木茂次郎による箱書のある碗（個人蔵）



2 1940年帝室博物館ラベルのある碗（個人蔵）



紙ラベル



新瀬戸小旧蔵  
帝室博物館ラベル



甚兵衛窯発掘のようす  
北陸日日新聞 1936年9月10日2面



甚兵衛窯発掘品 北陸タイムス 1936年9月10日2面



昭和40年代の甚兵衛窯のようす（立山町教育委員会）

立山町歴史交流ステーション日なた  
「復興期の越中瀬戸焼展」展示解説書2  
2025, 10.25 発行

